様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ４ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０３８７

研究課題名（和文）学生支援者養成モデルの検証に関するコミュニティ心理学的研究

研究課題名（英文）Astudy of community psychology on verification of educating student supprt stuff

研究代表者
杉岡　正典（sugioka, masanori）

名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・准教授

研究者番号：７０５２３３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，自殺問題を抱える学生に対応する大学教職員の負担感および大学生の自殺関連行動とその回復要因、さらに援助要請や自殺予防教育のあり方を検討した。まず、大学の教職員がハイリスク学生に対応する際、単独でサポートしようとすることで不安を募らせていることが分かった。キャンパスカウンセラーと教職員との連携体制の構築が喫緊の課題であると考えられた。また、大学生の自殺保護因子を検討した結果、危機からの回復には、家族・友人のサポート授受が大きな要因であった。さらに、援助要請意図は、学校に満足し，教員を信頼できることで醸成される可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study found that the academic staff of Japanese colleges felt anxious when they had to support suicidal students on their own. As an urgent task to be performed by each college, academic communities should establish a system to promote collaboration between campus counselors and academic staff.Also, we studied suicide resilience, investigating the relationship between resilience and social support in college-age samples. By factor analysis, we found that suicide resilience was composed of three factors(internal protective, emotional stability and external protective), and each factor had negative correlation with suicidal ideation. As for resilience and social support, result showed that support receptions from family and provisions for close friends were positively correlated with suicide resilience.Also,we found the reliance on teachers made important role in student's help-seeking intent.

研究分野：臨床心理学

キーワード：学生相談　自殺　コミュニティ心理学

１．研究開始当初の背景

わが国の自殺による死亡者数は近年減少傾向にあるが、中高年層と比べ、大学生を含めた若年層の自殺率はあまり改善していない。2012 年に見直された自殺対策大綱において、若年層の自殺対策が重点項目の１つに掲げられているように、依然として若者の自殺予防は社会全体で取り組むべき大きな課題である。大学生に限ってみても、1996 年以降、自殺は大学生の死因の第 1 位を占めており、大学や学生相談機関が学生の自殺予防にいかに貢献できるかが問われている。

そこで，多くの大学は，学生の自殺予防のために「大学ぐるみの学生支援体制の構築」を模索している。これはコミュニティ・モデルに基づいた支援体制である。すなわち，学生相談センターなど学内専門的機関の充実のみならず，ピアサポーターの養成や指導教員・学生支援担当教職員の役割を強化し，学生と身近に接する支援者の機能を拡充することで，大学ぐるみで学生の孤立と自殺を防ごうとするものである。

このような大学ぐるみの支援体制の構築は，危機に陥った学生が周囲に助けを求めやすいという援助要請コストの観点からも有用である（杉岡，2010）。その一方で，このモデルは，ピアサポーターや教職員など学生から助けを求められる側に対して多大な心的負担を生じさせる可能性が高い。援助の専門家ではない教員やサポーター学生などの支援者が，学生の危機場面に遭遇する機会が増すことで，その負荷と責任は増大する。不幸にも，関わっていた学生が自殺した場合，支援者は生涯消えることない心理的打撃を受けることもある。実際，学生相談センターに寄せられる教職員からの相談は年々増加し，その内容も「学生と関わる不安」や「燃え尽き」が多くなった。このようなコミュニティ・モデルから生じてくる非専門家の役割拡充とそれに伴う不安や負荷は，従来の研究で見過ごされてきた課題である。また、大学において自殺予防を充実させるには、自殺の危険因子のみならず、保護的要因であるレジリエンスやソーシャルサポートを詳細に検討することも必要となる。さらに、大学で予防教育を実施することは、学生の援助要請を促進し、他者の心の SOS の対応を知る機会となるが、自殺予防教育のあり方について、十分なコンセンサスが得られているわけではない。

２．研究の目的

本研究では，学生相談分野における実際的な支援者養成モデルを検証するため，大学教職員の負担感および大学生の自殺関連行動及びその回復要因、援助要請や自殺良い棒教育のあり方を明らかにする。

３．研究の方法

（1）大学教職員の不安・負担感を明らかにするため，教職員を対象とした調査研究及び相談事例の分析を行った。

（2）大学生の自殺保護要因を検討するため、質問紙調査及び相談事例の分析を行った。

（3）今後行われるべき自殺予防教育のあり方を検討するため、援助要請意図と環境要因との関連について中学生への質問紙調査と大学生の相談事例の分析を行った。

４．研究成果

（１）大学教職員の不安・負担感

自殺リスクのある大学生と向き合う際の大学教職員の不安を把握し，教職員にとって必要なサポートを探ることを目的に、質問紙調査を実施した。調査は 2014 年 8 月に大学教職員（90 名）を対象にアンケート形式で行われた。分析の結果，81 名（90%）が「自殺のハイリスク学生と関わる不安」があると答え，80 名（88.1%）が「教職員に対する支援」を求めていることが分かった。教職員が抱く不安の内容を質的に分析した結果，『対応の仕方が分からない』（53.1%），『逆効果の危険性』（13.6%）が多かった（図 1）。また、教職員が学内専門家に求める支援内容については，『キャンパスカウンセラーとの連携・協働』（30.0%）、『相談場所の確保』（18.7%）が多かった（図 2）。

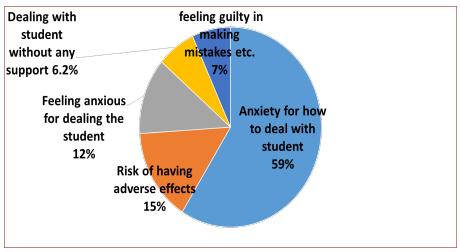

図１　教職員の対応不安の内容

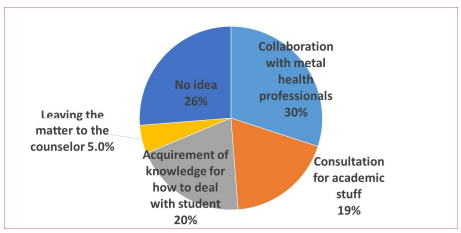

図２　教職員の求める支援

以上のことから，わが国の大学教職員は，自殺のリスクのある学生への対応に不安を抱えていること、単独で学生をサポートしようとする傾向にあり、そのことで不安を募らせていることが推察された。そのため，大学全体がいかにコミュニティとしてキャンパスカウンセラーと教職員との連携体制を構築していくかが喫緊の課題であると考えられた。

（２）大学生の自殺の保護要因の検討（レジリエンスとサポートの授受）

大学生の自殺保護要因について、自殺に対するレジリエンス（抵抗力）とサポートの授受について検討した。調査は 2015 年 11 月に行われ、対象者は大学生 100 名であった。

まず、海外で使用されている自殺レジリエンス尺度（Osman,A.,et al,2004）を行い、因子分析したところ、『内的保護』『外的保護』『情緒的保護』の 3 因子構造であり、海外の先行研究と同様の因子構造であることが示唆された（table.1）。

Table.1 Factor Structure of the suicide resilience inventory-25

Item	Fcators		
Factor 1 internal Protective	1	2	3
8.I can resist thoughts of killing myself when I feel emotionally hurt.	0.95	-0.05	-0.02
12. I can resist thoughts of killing myself when faced with a difficult or life-threatenine situation.	0.94	0.04	-0.11
24. I can resist thoughts of killing myself when I feel hopeless about the future.	0.91	0.07	-0.13
18. I can handle thoughts of killing myself when I feel lonely or isolated from other people.	0.90	0.04	-0.12
23. I can resist thoughts of killing myself when faced with humiliating or embarrassing situations.	0.82	-0.03	0.03
10. I can resist the urge to kill myself when I feel depressed or sad.	0.82	0.02	0.06
21. If I am in trouble, I can ask for help from people close to me rather than attemnt to kill myself.	0.67	-0.07	0.31
4. I can deal with the emotional pain of rejection without thinking of killing myself.	0.61	0.10	0.14
14. I can control the urge to harm or hurt myself when I am criticized by someone.	0.61	0.15	0.06
16. Even if people close to me are angry with me, I can approach them if I want to talk about my personal problems.	0.36	0.29	0.06
Factor 2 Emotional Stability			
13. I am proud of many good things about myself.	-0.13	0.92	0.06
20. Regardless of the problem situation I face, I can be happy with myself.	0.13	0.85	-0.15
1. There are many things that I like about myself.	-0.07	0.82	0.05
5. I like myself.	0.02	0.80	0.01
25I feel cheerful about myself.	0.27	0.67	-0.01
2. Most of the time, I see myself as a happy person.	-0.10	0.57	0.19
19. I feel that I am an emotionally strong person.	0.28	0.56	-0.10
9. Most of the time I set goals that are reasonable for me to meet.	0.25	0.52	-0.05
11. I am satisfied with most things in my life.	0.12	0.39	0.12
Factor 3 External Protecvie			
22. I have close friends or family members that I could turn to for emotional support if I were to think of killing myself.	0.25	-0.27	0.84
3. People close to me would find the time to listen if I were to talk seriously about killing myself	-0.30	0.24	0.82
7. I can find someone close to me to give me support (e.g., financial, shelter) if I find myself in a jam	-0.11	-0.02	0.77
15. I can ask for emotional support from people close to me if I were to think about killing myself.	0.20	0.17	0.58
6. I could openly discuss thoughts of killing myself with people who are close to me, when it is necessary	-0.02	0.24	0.57
17. I can find someone (parent, friend, spouse, or relative) who can help me cope if I should think about killing myself.	0.31	-0.06	0.56
Fctor intercorrelations			
Factor 1	1.000		
Factor 2	.636	1.000	
Factor 3	.572	.530	1.000

また、これら 3 因子と希死念慮尺度について相関分析を行った結果、それぞれ負の相関が認められた。さらに、自殺レジリエンスとサポートの授受について検討した結果、『家族からのサポート享受』と『友人へのサポート提供』が自殺レジリエンスの各因子と正の相関がみられた。

以上のことから、家族から多くのサポートを受けつつ、友人に対しサポートを提供できることが、大学生の自殺レジリエンスの高さと関連することが示唆された。

次に、学生相談における 3 事例(リストカットや解離状態を示した事例（事例 1)、友人を自殺で失い複雑性悲嘆を呈した事例（事例 2)、自殺未遂からの回復した事例（事例 3））の分析を行った。

事例 1 では、学生がリストカットや解離を示した背景に、「母親との情緒的な葛藤や共揺れ」といった広義の外傷体験が関連したことが想定された。当該学生は不快な感情が生じた際，それを言葉にして他者と共有するのではなく，むしろ受動的に自分自身で引き受け，自己を“分割”することで解消しようとしたことが，希死念慮や解離傾向を発達させていったと考えられた。

事例 2 では、学生の悲嘆反応が遅延し複雑化した背景には、ポストベンションなどの事後サポートが受けられなかったことに加えて、家族との情緒的関係の乏しさ、友人関係から引きこもる傾向等がその背景要因として考えられた。

事例 3 では、過剰適応的生き方が限界に達し自殺未遂を企てた事例であるが、その背景には、親の愛情を得るために偽りの人生を生きるしかなったこと、その表面的な関わりのため、友人関係でも深い人間関係が築けなかったことがみられた。

そのような学生の回復過程をみてみると、これら 3 つの事例に共通して、カウンセラーとの面接関係を土台にして、家族・友人との関係を振り返る作業を行い、他者との関係性が活性化していく中で、学生の有する本来的なレジリエンスが回復することが示された。

これらのことから、調査研究・事例研究ともに、学生の自殺の危機とその回復には、家族・友人とのサポート要因が大きく影響を与えていることが示唆された。

（3）援助要請意図と環境要因との関連からみた自殺予防教育のあり方の検討

自殺予防対策の 1 つに，学校における自殺予防教育の充実を図ることがあげられる。2012 年に見直された自殺対策大綱では，重点事項の一つとして若年層の自殺予防が掲げられ，「児童生徒が命の大切さを実感できる教育だけでなく，生活上の困難・ストレスに直面したときの対処方法を身に付 けさせるための教育を推進する」と自殺予防教育の推進が謳われている。さらに，2016 年 3 月に成立した自殺対策基本法の一部を改正する法律では，学校における教職員への啓発や児童生徒対象の自殺予防教育の実施について明記されている。

自殺予防教育とは，子どもや教員がこころの健康に関する意識を高め，困難に陥った時に周囲に SOS の出せる力や他者の SOS に気づく力を養うための教育的取り組みであり，欧米の研究では一定の効果が示されているが（ジェイコブ他，2010），わが国の学校現場への導入は進んでいないのが現状である。その背景には，自殺予防教育をどのように実施すれば良いのかが十分理解されていないことや，相談行動を促進する際に「単に相談を呼びかける」以外の効果的な方法が明らかにされていないことが考えられる。

そこで「生徒の身近な他者への相談行動の促進・抑制要因」を明らかにすることを目的に①悩みを抱えた際の相談意図（相談しようという気持ち)、②相談行動への意識（肯定的な意識、否定的な意識)、③（生徒が捉える）学級の雰囲気、④（生徒が感じる）教師

への安心感、について調査した。調査時期は2019年12月、対象者は中学生1373名であった。

まず、悩みを抱え，自分一人では解決できない場合，サポート源である「親」「先生」「友だち」「スクールカウンセラー（以下SCとする）」のそれぞれに相談したいと思うかどうかを，悩みの領域ごと(勉強・進路・友達関係・心身の悩み)に，「全くそう思わない（1点）」～「非常にそう思う（4点）」にてたずねた。それぞれの平均値を表１に示す。相談意図について検討したところ，他のサポート源と比較して，友人に対する相談意図得点が高いことから，友人が，生徒の身近な相談相手として選ばれやすいことが窺えた。これは，先行研究でも確認されている傾向であり（榎本，2003），思春期の子どもにとって，“同年代との横のつながり”が大きなサポート源になっていることが示唆された（表2）。

表2. サポート源別相談意図の平均値

	悩みの領域				
	勉強	進路	友人関係	心身の悩み	平均値の差
親	2.69	3.12	2.50	2.57	進路＞勉強＞心と体＞友人関係
先生	2.66	2.89	2.34	2.10	進路＞勉強＞友人関係＞心と体
友人	2.97	2.82	2.92	2.62	勉強･友人関係＞進路＞心と体
SC	1.73	1.80	1.84	1.80	友人関係＞進路･心と体＞勉強

次に、学級風土尺度（「学校満足感」「学習志向性」「学級内不和」）と教師への信頼感尺度(教師信頼感)，及び相談利益・コスト尺度（「相談に伴う不安」「ポジティブな結果」「秘密漏えい」「自助努力による充実感」）の相関係数を算出した(表３)。

表3. 相談利益･コスト尺度, 学級風土尺度及び教師への信頼感尺度の下位尺度間相関係数

	相談に伴う不安	ポジティブな結果	秘密漏洩果	自助努力による充実感	学級満足感	学習志向性	学級内不和	教師信頼感
相談に伴う不安	1							
ポジティブな結果	-.251	1						
秘密漏洩果	.677	-.257	1					
自助努力による充実感	.340	-.262	.290	1				
学級満足感	-.341	.481	-.328	-.102	1			
学習志向性	-.187	.349	-.222	-.053	.586	1		
学級内不和	.341	-.222	.336	.147	-.460	-.420	1	
教師信頼感	-.230	.513	-.268	-.140	.510	.422	-.329	1

決定係数（R2 ）に高い値を示した変数を投入して，最尤法推定法による共分散構造分析を行った。モデルの適合度は GFI=.994, AGFI=.970, RMSEA=.066 であった。有意な影響がみられたパスを図３に示す。

「学級満足度」は，生徒の相談に対する意識である「ポジティブな結果」に影響を及ぼし，その「ポジティブな結果」が「友人への相談意図」と「教師への相談意図」に正の影響を与えていた。同様に「教師信頼感」も「ポジティブな結果」を介して相談意図に影響を及ぼしていた。加えて「教師信頼感」は「教師への相談意図」に対して直接的な影響を及ぼしていることが示唆された。

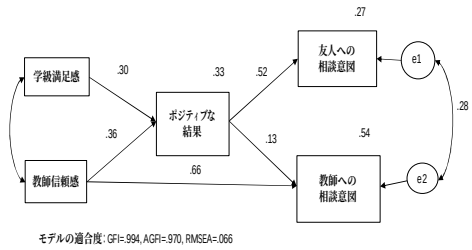

図3. 学級雰囲気と教師信頼感及び相談行動への意識が相談意図に与える影響

相談意図には「ポジティブな結果」が影響すること，また「ポジティブな結果」には，「学級満足感」と「教師への信頼感」が影響することが示唆された。さらに，「教師への信頼感」は「教師への相談意図」に直接的影響を及ぼしていることも示唆された。

結果を要約すると，子どもの相談意図は，相談することでよい結果が得られると認識されることで促進し，そのような認識は，学級に満足しており，教師を信頼できることで醸成される可能性が示唆された。また，教師への信頼感が高ければ，相談することで利益があるか否かに必ずしも左右されず，直接的に教師への相談行動を促進させることも窺われた。

本研究は、調査協力の得られた中学生を対象に行ったパイロットスタディである。その結果を大学生と比較検討することで、大学生に対する自殺予防教育のあり方を検討することが今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

(1) 杉岡正典　親面接により学生の自立が促進された面接過程‐親機能の回復の意義‐学生相談研究 36（１），1－11　2015.（査読あり）

(2)杉岡正典　解離性障害と診断された女子学生との面接過程.名古屋大学学生相談総合　センター紀要 15，　36－41，2015.（査読なし）

(3)杉岡正典　友人の自殺に遭遇した学生の隠された悲嘆‐モーニング・ワークが滞った事例から‐名古屋大学学生相談総合センター紀要 16，19-24、2016.（査読なし）

(4)杉岡正典　大学生の自殺予防に関する研究の動向　学生相談研究 38（3）265-279.（査読なし）

〔学会発表〕（計　６件）

(1)Masanori Sugioka & Sumino Wakabayashi

(2015). Anxieties experienced by academic staff of Japanese colleges who provide support for students with suicidal tendencies. The14th European Congress of Psychology (Milan,Italy)

(2)杉岡正典　「死と再生」のテーマを展開した女子学生の箱庭療法―学生相談場面において「遊ぶこと」の意義―　日本学生相談学会大会発表論文集 pp121（日本学生相談学会第 34 回大会、成蹊大学、2016 年 5 月 21 日～23 日

(3)Masanori Sugioka,Sumino Wakabayashi, Minako Tashima(2016) The relationship between suicide resilience and social support with family and friends in Japanese university students. 31st international congress of psychology. 2016 年 7 月 24~29 日　Yokohama, Japan

(4)杉岡正典・窪田由紀・石川雅健・和田浩平・山中大貴・大野志保・林亜希恵・山下陽平・井手原千恵　学校危機に遭遇した校長の体験と緊急支援チームの役割の検討―校長２名に対するインタビュー調査の分析から―　第 18 回学校心理学会（名古屋大学）2016 年 10 月 1 日～2 日

(5)杉岡正典・窪田由紀　中学生の相談行動に関する実証的研究‐より効果的な自殺予防教育の実施に向けて‐.日本コミュニティ心理学会第　回大会.(主催機関：上智大学，会場：四谷キャンパス)　2017 年 7 月 1 日～3 日

(6)Yamauchi, H., Ogura, M., Sugioka, M., & Suzuki, K. 2018.3 Validation of an ASD- and AD/HD-related support needs scale in a graduate student sample Asia-Pacific Conference on Education, Social Studies and Psychology Taipei, Taiwan

〔図書〕（計１件）

(1)心の発達支援シリーズ６　大学生活の適応が気になる学生を支える　明石書店 2016 年(160-167)

6. 研究組織（研究代表者）

杉岡　正典　（SUGIOKA Masanori）
名古屋大学心の発達支援研究実践センター/学生相談総合センター・准教授
研究者番号：70523314